報告　日本転倒予防学会 第 6 回学術集会（新潟）

転倒予防への挑戦～人を育て社会へ広げる～

・会　長：立川厚太郎（社会福祉法人新潟県身体障害者団体連合会 理事長）
　　山本智章（医療法人愛広会新潟リハビリテーション病院 院長）
・副会長：奥泉宏康（長野県東御市立みまき温泉診療所 所長）
　　上岡洋晴（東京農業大学大学院環境共生学専攻 教授）
・日　時：2019 年 10 月 5 日（土）17：00 ～ 20：00
　　10 月 6 日（日）　8：20 ～ 16：00
・会　場：朱鷺メッセ　新潟コンベンションセンター
　　〒 950-0078　新潟県新潟市中央区万代島 6 番 1 号

新潟市長　中原八一氏

社会福祉法人新潟県身体障害者団体連合会理事長の立川厚太郎会長，および医療法人愛広会新潟リハビリテーション病院院長の山本智章会長のもと，第 6 回学術集会が，朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンターにて開催された。851 名が参加した。参加者の職種では，看護師 253 名，理学療法士 169 名，医師 103 名，作業療法士 36 名，企業関係者 124 名，教職・研究職 39 名，介護・福祉関係者 34 名，その他の医療資格者・医療関係者 31 名，運動指導関係者 11 名，その他 77 名と，多岐にわたっていた（職種については重複あり）。

開会式では，立川厚太郎会長の開会宣言の後，地元新潟を代表して，中原八一市長より，歓迎の辞をいただいた。

●イブニングセミナー「多職種で骨卒中を防ぐ」　共催：中外製薬株式会社
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社

座長：遠藤直人（新潟大学）
講演：萩野浩（鳥取大学）

座長：遠藤直人氏

萩野浩氏

〈遠藤直人氏コメント〉

日本全国，鳥取県，新潟県での大腿骨近位部骨折の経年的推移から 2015 年以降の骨折発生率は横ばい状態であるものの，骨折数は増加，特に 80 歳代，90 歳代の骨折が今後も増加すると予想される。

ビタミン D の非充足（血中 25OH-D 低値）は骨折リスクであり，ビスホスホネートなどの骨粗鬆症治療薬の効果発現も得られない。

骨折予防の課題として 1）低い治療率，2）骨折後も次なる骨折リスクが高いことの認識が低い，3）低い治療継続率，がある。予防推進には高齢者脆弱性骨折を「骨卒中」として，重篤な病態ととらえ，多職種リエゾンサービスによる取り組みが重要である。

●モーニングセミナー　「転倒予防におけるポリファーマシーの問題」　共催：愛宕商事株式会社

座長：菅栄一（菅整形外科・皮膚科クリニック）
講演：転倒予防におけるポリファーマシーの問題（新潟）：市橋直子（（株）はあとふる薬局）
転倒予防におけるポリファーマシーの問題（岩手）：金澤悟（二戸薬剤師会）

座長：菅栄一氏

市橋直子氏

金澤悟氏

〈菅栄一氏コメント〉

開会式前の早い時間にもかかわらず 200 人を超す参加者であった。薬剤師の立場から新潟県と岩手県での転倒とポリファーマシーの関連調査と減薬の取り組みが 2 題報告された。

市橋氏から，新潟県での大腿骨近位部骨折患者の使用薬剤数とその種類の傾向について述べられた。またモデル病院での病院薬剤師と処方医との協議で減薬できた事例と，退院時にかかりつけ医とかかりつけ薬局に薬剤管理サマリーを提供し退院後の薬剤管理に役立てていることが紹介された。

金澤氏から，岩手県薬剤師会として調剤薬局で在宅 50 歳以上の転倒経験者の服薬調査では Ca 拮抗剤の使用が一番

多かったとの報告があった。また処方医と薬剤師を対象としたポリファーマシーに関する意識調査が報告され，ポリファーマシーとなる要因とその対策が述べられた。精神科系などの内服薬剤を頓服にして，徐々に減薬する方法が紹介された。

2題に共通していた内容は，服薬数は加齢とともに増加し，大腿骨近位部骨折が最も多い80歳代女性にて最も多かった。減薬には，薬手帳を1冊にしてかかりつけ薬局が患者の状態と服薬状況を把握して，処方医と連絡を密に取れる関係を築き，服薬指導を行うことの重要性が述べられた。

●大会長講演

座長：上岡洋晴（東京農業大学）

講演：もう一つの転倒予防～良寛さまの生涯を通して考える～：立川厚太郎（新潟県身体障害者団体連合会）

転倒予防から学ぶバリアフリーの精神：山本智章（新潟リハビリテーション病院）

座長：上岡洋晴氏

立川厚太郎氏

山本智章氏

〈要旨〉

立川氏は，「がっかりして悲しい表情になる。元気がなくなる」（ジーニアス和英辞典）といった，精神的な面から捉えた「転倒」を対象に，江戸時代後期，越後長岡（三島町）を中心に活動し，漢詩，和歌，書芸に秀でた「良寛さま」の生涯を通して，精神面（こころ）の転倒予防について講演した。

山本氏は，物理的なバリアーだけでなく，組織間，職種間，また個々の人々の間に存在するバリアーをも含んでいる日本転倒予防学会の理念にあるバリアフリーの精神に基づき，新潟での2つの活動を紹介した。1つ目は，骨脆弱性骨折患者への骨折リエゾンサービスの成果で，新潟リハビリテーション病院が2016年に国際骨粗鬆症財団の「Capture the Fracture」病院に日本で初めて認定されたことである。2つ目は，新潟県高校野球連盟が各野球連盟の枠を超え，医療との壁を乗り越えて新潟県青少年野球団体協議会を設立し，青少年野球の健全化とスポーツ生涯予防の実現へ向けて高校野球の弾数制限導入という大きな提言を行ったことである。

●シンポジウム1「労働災害における転倒・転落事故の諸問題」

座長：岡田真平（身体教育医学研究所）

座長：小松泰喜（日本大学）

講演：転倒災害などの労働災害防止について：高橋英人（新潟労働局健康安全課）

転倒災害の現状と対策：川越隆（愛知医科大学）

建設業における転倒・転落防止に向けた安全管理：南場明夫（第一建設工業（株））

転倒・転落事故と法的諸問題：村田有生（TM共同法律事務所）

座長：岡田真平氏と小松泰喜氏

高橋英人氏

川越隆氏

南場明夫氏

村田有生氏

〈岡田氏コメント〉

平成30年度労働者死傷病報告で「休業4日以上の死傷災害」の第1位が転倒（25％）で，労働災害における転倒・転落事故は本学会としても取り上げるべき大きな課題であった。行政の立場から高橋英人氏，医科学の立場から川越隆氏，事業所管理者の立場から南場明夫氏，法律家の立場から村田有生氏が，それぞれの視点で諸問題ならびに対応策や今後に向けた提言を述べられ，質疑も活発で大変有意義なディスカッションが行われた。

〈小松氏コメント〉

労働者の高齢化もそうだが，重要なのは，転倒災害を防ぐことにある。労働者の死傷病者数は，その第一位が転倒であること（33%），さらにその内訳として高齢労働者が多いとする報告があった（高橋，新潟労働局）。一方，転倒に対する対策として健康管理は進んでいるものの，経済システムを考えた時にこれからの高齢労働者の増加に対する対応も学会として考えていくとよいのでは。それと，労働安全衛生法は学会としてきちんと取り上げるべきだろう。

●シンポジウム２　「高齢者の転倒に関わる医学，多面的視点」

座長：原田敦（国立長寿医療研究センター）

座長：金森雅夫（立命館大学）

講演：関節障害と転倒：立入久和（たちいり整形外科）

歯科の視点から高齢者の転倒を考える：白野美和（日本歯科大学新潟病院）

高齢者疾患の特性・フレイルと転倒：小川純人（東京大学）

糖尿病と転倒，そして骨折リスク：石澤正博（新潟大学医歯学総合病院）

女性医学からみた骨粗鬆症：森川香子（新潟市民病院）

座長：原田敦氏と金森雅夫氏

〈原田氏コメント〉

本シンポジウムの全体像を俯瞰すると，転倒予防の核であるフレイルの講演が中心に配され，その前後にこれまで取り上げられなかった重要領域として，関節障害，歯，糖尿病，女性医学と転倒予防について，各オーソリティによって講演され，人工関節後の転倒増加，食べるときの口腔機能の重要性，糖尿病と転倒予防の対策矛盾，エストロゲンやビタミンD低下の尽きない悩みなど，新しい発見に満ちていた。

立入久和氏

白野美和氏

小川純人氏

石澤正博氏

森川香子氏

●シンポジウム３「施設内転倒・転落の包括的対策」

座長：梅原里実（高崎保健福祉大学看護実践開発センター）

座長：山田実（筑波大学）

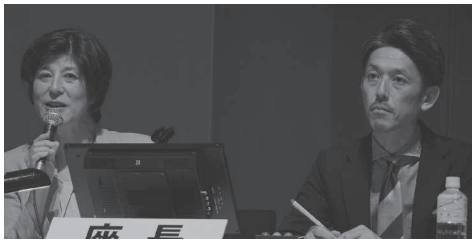
講演：健康寿命の延伸について：金子雄一郎（厚生労働省関東甲信越厚生局）

介護老人保健施設における10年間の転倒・転落予防活動の展開

〜転倒・転落件数が半分以下に低下した要因を探る〜：國分千津子（三方原ベテルホーム）

病院に於ける医療安全上の身体拘束の問題：黒川美知代（武蔵野赤十字病院）

地域「通いの場」活動におけるロコモ予防・転倒予防9年間の取り組み：新井春美（新潟市秋葉区健康福祉課）



座長：梅原里実氏と山田実氏

〈梅原氏，山田氏コメント〉

行政の立場から介護予防推進の概観と，介護老人保健施設，病院，地域において経年的に実施した成果や転倒防止への取り組みについてそれぞれの立場で述べてもらった。超高齢社会に向けた転倒予防への挑戦には，多職種連携・継続・組織的な取り組みが重要と捉えた。

金子雄一郎氏

國分千津子氏

黒川美知代氏

新井春美氏

●パネルディスカッション　「転倒・転落アセスメントツールの新たな展開」

座長：鈴木みずえ（浜松医科大学）

座長：征矢野あや子（京都橘大学）

講演：転倒・転落アセスメントツールの新たな展開

～転倒・転落アセスメントツールへの社会的期待と今後の展望～：鈴木みずえ（浜松医科大学）

転倒・転落アセスメントツールへの社会的期待と今後の展望：横田慎一郎（東京大学）

赤十字病院における転倒・転落予防活動のための手引き：黒川美知代（武蔵野赤十字病院）

介護老人保健施設における施設管理・システムと転倒予防との関係

～転倒・転落アセスメントツールの観点から～：杉山智子（順天堂大学大学院）

総合討議パネリスト：梅原里実（高崎健康福祉大学）

上内哲男（東京蒲田医療センター）

安延由紀子（大阪大学大学院）

梅原里実氏

上内哲男氏

安延由紀子氏

〈征矢野氏コメント〉

転倒・転落アセスメントツール（以下，ツール）委員会の活動の総括として，3回目のパネルディスカッションを開催した。ツールを研究的視点から検討したAグループの横田氏は，既存のツールが浸透している現在，新しいツールに置き換えることよりも，目的（スクリーニング・精査・対策導出）に応じて正しく使い，対策につなげることの重要性を述べた。病院におけるツールの活用について検討しているBグループの黒川氏は，日本赤十字社におけるツールの実態把握と整備・再構成，啓発教育について報告した。施設におけるツールのあり方を検討しているCグループの杉山（智）氏は，ツールと共に生活の中で転倒リスクに関わる気づきを統合する必要性などを述べた。これらの成果を統合し，鈴木委員長から提言案を提示した。

座長：鈴木みずえ氏と征矢野あや子氏

鈴木みずえ氏

横田慎一郎氏

黒川美知代氏

杉山智子氏

●ワークショップ「転倒予防指導士スキルアップ！～役割と活動を広げるために～

座長：奥泉宏康（みまき温泉診療所）佐久間真由美（新潟医療福祉大学）

北湯口純（身体教育医学研究所うんなん）

ファシリテーター：村山拓也（新潟リハビリテーション病院）

三塚里香（新潟リハビリテーション病院）

佐野佐枝子（メディカルフィットネスロコパーク）

近藤公則（悠々健康村病院）

青木可奈（新潟西蒲メディカルセンター病院）

座長：奥泉宏康氏

座長：佐久間真由美氏

座長：北湯口純氏

グループワークの様子

〈佐久間氏コメント〉

奥泉氏のオープニングレクチャーでは転倒予防指導士の活動と役割に関してご講義いただいた。続いて北湯口氏司会のアイスブレーキングでは離席フリーの自己紹介で緊張もほぐれ，グループワークでは約８名ずつ８グループに分かれ，Ａ～Ｄ班は病院・施設での転倒予防活動，Ｅ～Ｈ班が地域での転倒予防事業への貢献と２つのテーマについてディスカッションしていただいた。その後，全グループから発表頂いた。タイトな時間割にも関わらず，活発な討論に盛り上がった。発表内容はHP 会員専用ページで紹介予定である。

（グループワーク成果物掲載 http://www.tentouyobou.jp/senmonka/18/1.html）。

〈北湯口氏コメント〉

本ワークショップでは，地域や病院・施設からの転倒予防の取り組みに関する企画・実行依頼を想定し，転倒予防指導士として具体的にどのようなアクションを起こすべきか検討するグループワークを行った。短時間の検討にもかかわらず，各グループからは多職種検討ならではの企画・実行アイデアが提案され，実際のアクションにつながりうる多くのヒントが得られる機会となっていた。具体的には，企画立案の前段として，情報収集や課題分析，ステークホルダーとの信頼関係づくり，ビジョンの共有が重要であること，その上で，対象者の視点に立った取り組み内容や中長期的な見通しをもった評価設計を検討する必要がある等の提案がなされていた。

●教育セミナー１「高齢者の転倒による頭部外傷」

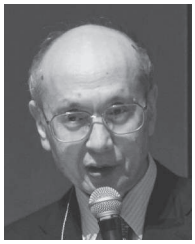
座長：石川正恒（洛和ヴィライリオス／音羽病院正常圧水頭症センター）

講演：恩田清（新潟脳外科病院）

〈石川氏コメント〉

転倒後の頭部外傷は重篤な後遺症を残す可能性があり，また，早期に対処することによって予後を大きく改善することができる点で重要である。最近は高齢者の頭部外傷が増え，抗血小板薬や抗凝固剤の服用例が増えていることが明らかにされた。また，頭部外傷後の慢性硬膜下血腫は適切な治療で運動麻痺や認知障害を改善しうる重要な疾患であり，軽微な外傷でも起こりうるので，外傷直後だけではなく１～２か月後に頭部 CT で発生がないことの確認が必要なことを丁寧にご教示いただいた。

座長：石川正恒氏


恩田清氏

●教育セミナー２「健康寿命を意識した高齢者脆弱性骨盤輪骨折の治療」　共催：HOYA Technosurgical 株式会社

座長：菅義行（菅整形外科医院）

講演：普久原朝海（新潟大学医歯学総合病院）

座長：菅義行氏

普久原朝海氏

〈菅義行氏コメント〉

普久原氏は，救急医学と転倒の立場から，これまであまり注目されてこなかった「骨盤輪骨折」について講演した。救急医学の現場の視点や経験から，診察・臨床所見にて恥骨骨折があったら，後方部の仙骨圧痛所見，検査は CT，特に MRI が有用であり，１週間車いすに疼痛で移動できない場合，転移が少ない内に，早期離床可能な低侵襲手術を選択し，ADL 低下を最小限に抑えることで健康寿命を延ばすことができることを解説した。

●スポンサードシンポジウム「転倒予防のためのテクノロジー」　共催：パナソニック株式会社
フランスベッド株式会社

座長：高杉紳一郎（佐賀整肢学園こども発達医療センター）
座長：山本創太（芝浦工業大学）
講演：拮抗筋への電気刺激による大腿部の筋力トレーニング機器「ひざトレーナー」
～「歩いて健康」を応援します～：飯澤貴浩（パナソニック（株））
ベッド周りの転倒・転落事故の現状と対策～ベッドでできること～：緑川明浩（フランスベッド（株））
転倒予防に関わる運度指導現場のためのシステム構築：村山敏夫（新潟大学）

座長：高杉紳一郎氏と山本創太氏

〈山本創太氏コメント〉

転倒予防に資する新しい製品，技術の紹介２件と，転倒予防のための運動指導システムについての新しい概念についての講演があった。技術紹介では，映像紹介に加えて実機デモンストレーションもあり，聴衆にアピールしていた。２件とも企業展示とリンクしており，シンポジウムで関心を高めた参加者が後刻展示ブースを訪れたようであった。質疑では，栄養介入のような，エンジニアが想定してこなかった視点での医師のコメントなどがあり，多職種連携の効果を感じる場面もあった。運動指導システムについての講演では，運動指導プログラムとその実施を「システム」として捉える工学らしい観点での提案があり，これもまた多職種連携らしい講演となった。

飯澤貴裕氏

緑川明浩氏

村山敏夫氏

●ランチョンセミナー１　共催：エーザイ株式会社
座長：武藤芳照（東京健康リハビリテーション総合研究所）
講演：骨折・転倒予防のための運動療法：岩本潤（慶友整形外科病院骨関節疾患センター）
認知症患者に対する転倒予防やせん妄を考慮した睡眠薬の使い方：内村直尚（久留米大学）

座長：武藤芳照氏

岩本潤氏

内村直尚氏

〈武藤氏コメント〉

岩本氏は，運動により，転倒・骨折を予防する効果を期待することができるか，監視下での適切な運動，高い導守率が重要であること，ジャンプ運動と筋力訓練の複合運動は有用なプログラムであること，無理な早歩きは転倒・骨折のリスクがあること等が述べられた。内村氏は，認知症患者の睡眠障害がせん妄に対しては睡眠薬の特性，種類，半減期，成分濃度等々勘案し，適切に使用すると共に，十分な光を浴びる，運動，午睡の調整，食事習慣等の日常的なアプローチが重要であることが述べられた。

●ランチョンセミナー２「慢性腰痛のコントロールと転倒対策～神経障害性疼痛から成人の脊柱変形まで～」
共催：第一三共株式会社
座長：山崎昭義（社会医療法人仁愛会新潟中央病院）
講演：渡邊慶（新潟大学医歯学総合病院）
〈要旨〉

座長：山崎昭義氏

渡邊慶氏

脊柱変形とそれに伴う慢性腰痛症は，薬物療法の効果が期待できない難治性腰痛の一つであり，患者数は増加の一途をたどっている。成人期には「腰まがり」といわれる後弯変形により，体幹バランスの悪化をきたし，運動器症候群や易

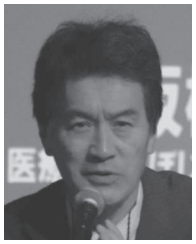
転倒性の原因となる。脊柱変形強制手術は，入院コストや QOL の低下など課題が多く，保存治療のエビデンスは限られている。

演者らは，患者教育と脊柱変形に応じたストレッチングや体幹筋力訓練を取り入れることで，腰痛および QOL の改善を目指し，一定の効果を確認している。特にホームエクササイズの継続のためには理学療法士指導下での介入がより効果的であり，自己認識に基づく運動継続がより重要になる。

●スポンサードセミナー１　「骨強度と転倒～治療薬評価の落とし穴」　共催：雪印メグミルク株式会社

座長：山本智章（新潟リハビリテーション病院）

講演：板橋明（くぼじまクリニック／埼玉骨疾患研究センター）


座長：山本智章氏

板橋明氏

〈要旨〉

治療により骨強度が増加しても，それを上回る外力が作用すると骨折が発生する。安静状態だった患者が治療により活動性が増し，結果的に転倒の機会，骨折の機会が増えてしまうという，評価の落とし穴を見落としてはならない。転倒しても骨折しないですむ対策としてヒッププロテクターが考案されてきたが，使用感の向上も含めて新たなヒッププロテクターの可能性を調べてみたい。骨量を増加させ，骨強度を高める薬剤の使用は重要である。また，牛乳のタンパク質には骨芽細胞を刺激して骨形成を促進させる成分と，破骨細胞を抑制して骨吸収を減少させる成分が存在し，骨密度を増加させることが判明した。これらの成分を含むタンパク質分画は MBP（乳塩基性タンパク質）と名付けられた。MBP の作用についても検討したい。

●スポンサードセミナー２　「二次骨折予防の骨折リエゾンサービスクリニカルスタンダード」

共催：ユーシービージャパン株式会社

座長：松下隆（福島県立医科大学）

講演：澤口毅（富山市民病院）

座長：松下隆氏

澤口毅氏

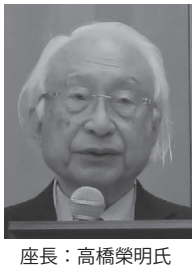
〈要旨〉

一度脆弱性骨折を起こした患者の二次骨折リスクは極めて高くなるので，骨折を治療した後も骨粗鬆症治療を継続することが重要である。日本における二次骨折予防の普及に向けて，骨折リエゾンサービス実施の指標となる「日本版二次骨折予防のための骨折リエゾンサービス（FLS）クリニカルスタンダード」が策定された。FLS を行うには，対象患者の特定，二次骨折リスクの評価，投薬を含む治療の開始，患者のフォローアップ，患者と医療従事者への教育と情報提供という５つのステージを踏み，準備＜現状把握・チーム作り＞，作成＜役割分担・内容の精査＞，導入＜ツールの準備・目標＞，改良＜問題発掘・見直し＞の４つのステップで治療プロトコールを導入していく。演者の施設では，2016 年より FLS を開始し，退院時の骨粗鬆症治療率は 90％で，１年後の治療継続率は 84％となった。

●スポンサードセミナー３　「多職種間連携教育を学ぶ」　共催：NSG グループ，新潟医療福祉大学，愛広会，愛宕福祉会，上越あたご福祉会，新潟脳外科病院，中条中央病院

座長：高橋榮明（新潟骨の科学研究所／新潟リハビリテーション病院）

講演：アジアで広がる「連携総合ゼミ」～国際社会・地域社会で活躍する専門職の育成を目指して～：松井由美子（新潟医療福祉大学）


座長：高橋榮明氏

松井由美子氏

〈要旨〉

新潟医療福祉大学は，2004 年，理学療法学科，作業療法学科，言語聴覚学科，健康栄養学科，社会福祉学科の５学科で「総合ゼミ」を始めた。2013 年からは，「連携総合ゼミ」へと改正され，進化し続けている。共生型大学連携事業による「連携教育学生セミナー」開催を契機に，新潟青陵大学，新潟薬科大学，日本歯

科大学新潟短期大学，新潟リハビリテーション大学が「連携総合ゼミ」へ参加している。また，本学の国際交流委員会を中心に，フィリピンのアンヘレス大学，サント・トマス大学，台湾の国立陽明大学，中山医学大学，ベトナムの本番国際大学，ハイズオン医療技術大学との大学間締結も進められている。今後の予定として，2020 年から 3 年間，「連携総合ゼミ」を使ってハイズオン医療技術大学の複数の学科連携による訪問サービスを提供していく。

■一般演題（口演・ポスター）

●一般口演

☆一般口演 1 「新しい転倒予防の挑戦 」

座長：近藤和泉（国立長寿医療研究センター）

鮫島直之（東京共済病院）

- **体幹 2 点歩行動揺計 " THE WALKING® " を用いた運動介入が運動機能や歩容に与える影響 ：野澤秀隆（マイクロストーン（株））**
- **懸垂装着型ロボットにおける安全性の試験的検討：神谷正樹（国立長寿医療研究センター）**
- **転倒転落アセスメントスコアシートにおける重要項目抽出と早期多職種ウォーキングカンファレンスへの応用：平井覚（松山市民病院）**
- **足底感覚刺激用靴下が地域在住高齢者のバランス機能と歩行機能に及ぼす影響：馬場孝浩（介護療養型老人保健施設いずみの／信州大学大学院）**
- **転倒転落予防のためのフローチャートは活用されているか？**
  ～看護師の理解度と実施状況調査より～：飯田美裕樹（JMA 東埼玉総合病院）
- **医工連携による骨折まで至った自宅トイレ関連転倒の特徴解明**
  ～入院時ベッドサイド調査と退院後自宅訪問調査から～：孫輔卿（東京大学）

〈近藤氏コメント〉

高齢者は重心移動の範囲を狭くする傾向があり，これが長く続くと機能低下につながる。逆に適切なアプローチにより，バランス保持能力を向上させると重心移動の範囲が広がってくる。野澤氏の発表では，その根拠が如実に示されており興味深かった。

一般口演発表の様子

☆一般口演 2 「転倒予防の医科学」

座長：泉キヨ子（帝京科学大学）

渡邉洋（渡辺整形外科）

- **通所リハビリテーションでめまいを有する利用者の転倒予防を考える：枝村和也（介護老人保健施設サンライズ・ビュー）**
- **情動は移動能力の認識に影響するのか？～高齢者の身体認識における情動と認知機能の役割～：篠﨑未生（国立長寿医療研究センター）**
- **国内中山間地域住民における転倒頻度と歩行動作の関係:西野勝敏（新潟県健康づくり･スポーツ医科学センター）**
- **下部尿路症状通院患者の転倒リスクに関する実態調査：永江浩史（ながえ前立腺ケアクリニック）**

〈泉氏コメント〉

枝村氏は，通所リハビリテーション（通所リハ）利用者のめまい・ふらつきを調査し転倒との関係から 65％に症状がみられ，通所リハでの前庭機能リハビリテーションの必要性を示唆した。篠﨑氏は，高齢者の身体認識における抑うつと認知機能の役割について，退院時の認知機能を 3 群に分けて検討し，認知機能の良い群では抑うつが示唆され，低い群では移動能力認識が転倒発生の影響を示唆した。ともに，活発な討論が行われ，新たな高齢者の転倒予防の視点として今後に期待したい。

〈渡邉洋氏コメント〉

西野氏は，考察で股関節周りの運動指導が必要であることを示唆したが，具体的にどのような運動がよいのか？という情報まで提供していただきたい。永江氏は「尿失禁」は転倒予防のマーカーになると報告し，未加療の過活動膀胱群を調査する必要性を述べており，将来に期待したい。

☆一般口演 3 「施設内転倒予防」

座長：上内哲男（東京蒲田医療センター）

饗場郁子（東名古屋病院）

- **骨粗鬆症リエゾンサービス介入患者における非骨折患者と橈骨遠位端骨折患者の運動機能評価の比較検討：本東剛（金沢医療センター）**
- **同一施設において急性期病棟から回復期リハビリテーション病棟へ転棟した患者の転倒発生率の変化：加藤喜隆（藤田医科大学病院）**
- **急性期病院における自宅見取り図を用いた転倒予防介入の有効性 〜病院から在宅へシームレスな医療・介護連携〜：上田哲也（大阪府立大学大学院）**
- **当院での大腿骨近位部骨折例の転帰についての検討：稲葉竣也（名古屋第二赤十字病院）**
- **圧迫性頚髄症に対する手術前後の転倒の発生頻度に関する多施設前向き研究：木村敦（自治医科大学）**
- **脳神経外科急性期病棟における身体抑制低減への取り組み〜スタッフの意識調査からみえてきたもの〜：中濱美也子（新潟脳外科病院）**

〈上内氏コメント〉

施設内における転倒予防について 6 演題の発表が行われた。再転倒による外傷発生をいかに低減させるかといった取り組みが多く報告され，早期介入，情報共有，環境整備，手術，身体抑制低減などについて議論が行われた。特に，頚髄症に対する手術療法が転倒を減少させると報告した木村氏の報告には，高齢者の中には頸髄病変が未治療の場合も多く，手術療法の有効性と併せて疾患自体の認知向上も含めて，啓発への期待が座長の餐場氏より述べられた。

●ポスター

☆ポスター 1 「施設内転倒予防 病院急性期」

座長：安延由紀子（大阪大学大学院）

- **周術期における転倒転落予防に関する試み：山中祐二（東広島医療センター）**
- **当院急性期病棟における転倒事例の検討：井上悟志（福知山市民病院）**
- **脳神経センター病棟における転倒予防のための取り組み：宮内慰江（東京共済病院）**
- **転倒事例報告書からみたせん妄発症とその課題：東義庸（大分岡病院）**
- **脳外科病院手術室における転倒転落予防：安達雅史（新潟脳外科病院）**
- **婦人科がんの入院患者における転倒・転落の発生状況と危険因子を調査：荒川幸奈（豊川市民病院／湘南藤沢徳洲会病院）**
- **周術期における疾患別転倒要因の検討：松木僚治（貢川整形外科病院）**

〈安延氏コメント〉

転倒転落予防として，せん妄予防に対する取り組み，分析に関するものが 2 題であった。どちらも職員に対する理解の促しや取り組みの定着を課題としており，今後の活動が期待される。院内転倒予防として実際のマニュアル作成やラウンド，ADL 表記といった取り組みに関する発表が 2 題あった。対策が図や写真で具体的に示されるなど，習熟度による違いや他職種が見ても取り組める工夫がされており，技術の標準化が図られていた。疾患や治療に伴う要因との検討が 2 題，急性期と回復期の要因比較が 1 題あった。こうした各疾患，施設ごとの特徴をどう対策に反映させるか，今後の検討，活動に期待したい。

ポスター口演発表の様子

☆ポスター２「施設内転倒予防 病院回復期」

座長：村山明彦（群馬医療福祉大学）

・当院での転倒の現状と予防の取り組み：中村威彦（木村病院）

・転倒転落における多職種による生活介入の効果：坪井歩（すずかけヘルスケアホスピタル）

・回復期リハビリテーション病棟での複数回転倒症例の検討および環境シートを活用したカンファレンスの試み：齊藤麻希（福知山市民病院）

・当院回復期リハビリテーション病棟における転倒転落予防チームの取り組み～最小限の抑制で最大限の ADL を～：竹内麻友実（京都民医連中央病院）

・回復期リハビリテーション病棟における転倒の現状～インシデント・アクシデントレポートより振り返る～：信永美奈（新潟脳外科病院）

・インシデントレポートをもとにした転倒・転落アセスメントスコアシートの見直し：高野智恵子（新潟脳外科病院）

・当センター回復期リハビリテーション病棟における転倒事故の傾向について：牧賢一郎（国立長寿医療研究センター）

〈村山氏コメント〉

ポスターセッション２では，７演題の発表があった。病棟での転倒予防を図るためには，多職種連携が重要であることを言及する演題が多数を占めていた。特に印象に残り，将来性を感じた発表は，坪井氏と竹内氏の２演題であった。いずれの発表も，各専門職が有する課題や，認識のズレなどを可視化しようとする取り組みが秀逸だった。これらの研究においては，統計学的解析に基づく客観的な考察も重要だが，各専門職の語り（ナラティヴ）の部分に着目すると，新たな知見が得られるのではないかと思われた。

☆ポスター３ 「施設内転倒予防 病院」

座長：加藤真由美（金沢大学）

・当院における転倒・転落予防の取り組み～医療従事者の転倒予防に関する理解度について～：尾崎和成（市立伊丹病院）

・転倒件数減少への取り組み～転倒転落チーム介入の効果と課題～：近藤公則（悠遊健康村病院）

・「院内転倒・転落危険地帯発見ラウンド」の取り組み：角恵美（鳥取大学）

・当院における多職種連携による転倒予防への取り組み：三塚里香（新潟リハビリテーション病院）

・転倒・転落リスク表示による多職種連携アンケート調査結果の報告：森田歩未（鳥取大学）

・当センターにおけるリハビリテーション実施中の転倒事例に対する再発予防の取り組み：堀田雅人（国立長寿医療研究センター）

・当院における転倒防止対策の現状と課題～転倒骨折事例から～：渥美綾子（呉共済病院）

〈加藤氏コメント〉

病院内での転倒予防の取り組みについて７つの演題が発表された。いずれも成果のある研究であり，参加者の関心は高かった。転倒リスクの高い患者のリストバンドをクリーム色にしたり，てんとう虫のシールを貼ることでの患者の反応について質問があった。不快感などの問題は全く生じておらず，多職種からは転倒リスク者を識別しやすいため予防につなげられると評価が示された。しかし，シールを貼る看護師に負担感があることや，チームで転倒予防を達成できても病棟で続けてもらえないという問題が示され，次に解決する必要のある課題として共有された。

☆ポスター４ 「施設内転倒予防 病院」

座長：杉山良子（パラマウントベッド㈱）

・整形外科運動器疾患により入院中の患者の転倒・転落事故の現状と課題：山田昂（東北海道病院）

・当院における転倒転落の現状，課題と今後の取り組み：中野ますみ（八事病院）

・整形外科病棟における転倒インシデントの要因分析：鎌田優太（愛媛大学）

・当院での院内転倒の原因の調査と対策の検討：太田光洋（呉共済病院）

・腰椎手術後患者の転倒転落事例検討：伊藤直子（新潟中央病院）

・院内での転倒事故防止に向けた活動～履物に着目した介入の効果～：加島知明（永山病院）

・看護師の認知障害患者への身体拘束に関する認識の現状：牧野真弓（富山大学大学院）

〈杉山良子氏コメント〉

理学療法士が活躍できる整形外科病棟における転倒・転落事故の現状を示したものが４題，対策としての改善実施例が２題，そして身体拘束が１題であった。看護師が身体拘束を転倒転落対策として実施していることでの認識に焦点を当てたポスターでは，量的研究の結果として個人の認識を形成する背景，職場風土に展開できており，チーム医療の観点からも期待できる内容であった。

☆ポスター５「ロコモ，フレイルと転倒」

座長：天野力郎（富士吉田市立病院）

・ロコモフレイル外来受診者における1年後の転倒有無を予測する因子の検討:川村皓生(国立長寿医療研究センター)

・レーザー TUG 計測システムを用いたロコチェック陽性者の歩行特性：加藤龍一（JA 共済総合研究所）

・ロコチェック陽性に関連する要因の検討：新開由香理（JA 共済総合研究所）

・外来患者の転倒リスク実態調査：椎野牧子（新潟脳外科病院）

・ロコモ度の有無で作業に差はあるか～作業遂行，活動数に着目して～：栗田洋平（社会福祉法人十字の園）

・福島第一原子力発電所事故後に福島県双葉郡に設立された病院における転倒・転落対策：風間咲美（福島県立医科大学附属病院）

・地域在住高齢者におけるロコモ該当なしとロコモ度１に寄与する因子の検討：浅尾竜摩（慶友整形外科病院）

〈天野氏コメント〉

ロコモ・フレイルについて，１年後の転倒に関与する因子，ロコチェック陽性に関与する因子・ロコモ度と作業状態・ロコモ陽性者の歩行特性などについて検討がなされた。またレーザー TUG 計測システムの活用により詳細な歩行分析が行われるなど，今後の発展が望まれる討論が行われた。その他，外来での転倒リスクの評価はやはり困難な問題が多く，患者動線を含めた環境整備が重要なことが再認識された。また，原発事故被災地での転倒予防活動は現状では素晴らしい結果を得られているが，看護職員が潤沢に配置されている状況であり入院患者の増加時の課題が残されている。

☆ポスター６「介護サービスにおける転倒予防」

座長：安田彩（日本大学病院）

・介護施設における履物の現状と課題：櫻井寿美（(有) フットクリエイト）

・身体拘束廃止勉強会の実施が職員意識と介護現場の転倒状況に及ぼす効果：座光寺佳代（(株) 東急イーライフデザイン）

・有料老人ホームにおける多職種転倒予防カンファレンスの効果～転倒を繰り返すパーキンソン病を持つ高齢者の事例から～：江波戸寿樹（(株) 東急イーライフデザイン）

・介護老人保健施設における骨折調査結果の傾向：田村真衣（新潟リハビリテーション病院）

・通所リハビリテーションにおけるセラピストの役割による転倒発生率等の違い：青柳敏之（介護老人保健施設寿桂苑）

・地域医療魚沼学校での転倒予防事業の取り組み：清水直之（魚沼市立小出病院）

・退院後の自宅訪問調査による転倒・大腿骨骨折を経験した高齢患者の住環境変化：今枝秀二郎（東京大学大学院）

〈安田氏コメント〉

開始時間が遅れ予定終了時刻よりも超過したが，活発な討議がなされた。介護サービスの分野でも転倒予防の重要性が浸透し，履物の変化などの効果を実感したが，更なる課題の提示に考えさせられた。有料老人ホームでの職員の取り組みについての２題では，職員の「見守る目」の重要性を再認識させられた。医療では個別リハが重要視されているセラピストの役割も，介護サービスにおいて包括的介入をするためには変化させなくてはならないと感じた。病院内で実施している貴重な事業の報告や，介護保険の範疇には収まらない住宅改修の実態も提示され，介護保険制度の限界と課題を感じた。

☆ポスター 7 「地域における転倒予防」

座長：二瓶美里（東京大学大学院）

・薬剤師と多職種の連携により転倒予防に至った成功事例：辻野仁志（メロディー薬局やよい店）

・積雪寒冷地に居住する高齢者の転倒予防・健康維持に対する取り組みの検討〜季節による身体機能・QOL の変化に着目して〜：棚橋嘉美（北海道科学大学／北星学園大学大学院）

・東京消防庁の救急活動報告による 65 歳以上の日常生活転倒事故の実態：奥泉宏康（みまき温泉診療所）

・地域住民のための健康サロンの活動報告〜継続性についての考察〜：須藤大輔（国際医療福祉大学）

・服薬状況と転倒履歴〜新潟でのアンケート結果から〜：市橋直子（(株) はあとふる薬局）

・商業施設の空き店舗を利用した健康増進啓発活動の報告と今後の展開：打道京子（周南リハビリテーション病院）

・商業施設の空き店舗を利用した健康増進啓発活動の報告と今後の展開（第 2 報）：万田祥秀（周南リハビリテーション病院）

〈二瓶氏コメント〉

辻野氏は，在宅医療における転倒リスク薬判定表を用いた多職種連携転倒予防活動の試み。対象者，関わる在宅医の数，実積率などに関する活発な質疑応答がなされた。ぜひ全国に普及していただきたい。棚橋嘉美氏は，積雪寒冷地における夏季と冬季の転倒状況の違いと QOL との関連についての調査報告。季節と転倒，そして QOL を比較した興味深い内容だった。仮説を明確にしたうえで，貴重なデータを活かしてさらに研究を進めていただきたい。奥泉氏は，救急活動報告による日常生活での転倒事故の実態調査。データの量・質ともに充実しており，日常生活場面での転倒事故および救急搬送頻度を減少させるために非常に有用な報告であった。さらなる分析を期待したい。須藤氏は，健康サロン活動についての報告。継続性に関する議論だけではなく，活動時の転倒に対する配慮事項や，運営状況など具体的な方法に関する活発な意見交換がなされた。市橋氏は，質疑では，今回の分析結果からは，転倒の要因として疾患や環境因子などの影響も否定できないため，服薬状況以外の因子についても分析が必要であるとの議論がなされた。打道氏，万田氏は，毎回工夫を凝らした企画を行っており，参加率が高い活動であることが伺えた。各企画の参加者の満足度や，機能維持・向上などについてもさらに分析を進めていただきたい。

☆ポスター 8 「転倒リスク評価」

座長：渡邊進（熊本機能病院）

・転倒・転落予防に向けたアセスメントスコアシートの見直し：西谷真理子（山口赤十字病院）

・転倒転落防止対策マニュアルに関する現状と課題：尾中幸恵（原田病院）

・入院患者の移動自立に向けて理学療法士・作業療法士が評価する転倒リスク因子検討項目の実際：隅井太亮（岡山旭東病院）

・新職員を対象とした移乗技術の自己評価：中沢稔（静岡病院）

・車椅子転倒・衝突時における傷害評価についての検討：石川耕介（埼玉工業大学大学院）

・地域在住高齢者における転倒リスク評価としての質的 TUG の有用性：加藤啓祐（慶友整形外科病院）

・転倒予防集団体操教室への参加頻度別にみた転倒リスクスコアと運動機能評価：立入久和（たちいり整形外科医院）

〈渡邊進氏コメント〉

西谷氏は，自院のアセスメントシートが転倒の予防に不十分であると考え，個々のリスク要因をアセスメントできるシートの作成の必要性を報告した。尾中氏は，転倒対策マニュアルの現状と課題について調査し，アセスメントの再評価の実施率が低く，実施率向上に向けた業務改善について報告した。隅井氏は，セラピストが転倒リスク因子で重要視しているのは，バランス障害，認知機能，転倒歴が挙げられたが，夜間の活動度や睡眠薬服用なども評価に反映させていく必要性について報告した。中沢氏は，新職員の移乗動作の介助指導についての研修について，多職種合同での研修の必要性について報告した。石川氏は，車椅子使用時におけるダミーモデル使用による転倒実験を行い，転倒の最大傷害は側方転倒での頭部障害であるなどの実験結果を報告した。加藤氏は，地域在住高齢者を対象として，転倒リスク評価にアプリ「Hacaro iTUG」の活用の有用性について報告した。立入氏は，集団体操教室への参加頻度の違いによる運動機能と転倒スコアの変化について検討し，転倒スコアは治療判定効果には適さないことを報告した。

☆ポスター 9 「バランス機能と転倒」

座長：森田光生（タムス浦安病院／慶友整形外科病院）

・バランス機能を指標とした成人脊柱変形患者に対するノルディックポールの運動効果：中西景子（日本赤十字社医療センター）

・がんサバイバーと健常者での筋力，Mini-BESTest，TUG，重心動揺検査の関連性の差異について:森下慎一郎（新潟医療福祉大学）

・転倒・骨折一次予防手帳の活用と検証〜手帳完成・活用から 1 年患者アンケートから見えてきたこと〜：永冨浩志（東名古屋病院／名古屋医療センター）

・病棟でのバランス機能評価導入における SIDE（The Standing Test for Imbalance and Disequilibrium）の運用の検討：稀代康裕（富士吉田市立病院）

・院内転倒による骨折症例の骨粗鬆症評価と治療の現状：金子真理子（東名古屋病院）

・大腿骨近位部骨折症例における受傷時施設入所者の入所施設と受傷時の状況：小川幸恵（新潟中央病院）

・当院 OLS 介入患者における 2 ステップテストと運動機能，患者背景との関連：清川翔仁（金沢医療センター）

〈森田氏コメント〉

中西氏は，対象者は，歩行自立度はバラバラで普段使用の歩行補助具も異なっていた。エクササイズ時のみポール歩行を実施。アウトカムは画像指標と BBS であった。森下氏は，がんサバイバーと健常者の転倒に関連する身体指標を調査した。握力において有意差あり，Mini-BESTest で有意差があった。筋力に基づいたバランス機能の低下が示唆されたのは，がんサバイバーの経過的変化の一助になる可能性を感じた。永冨氏は，独自に作成した手帳の有効性を配布した対象者へのアンケートによって検証した。手帳は大変きれいに作成されており，これから取り組もうという施設には大変参考になったと感じた。稀代氏は，地域包括ケア病棟の看護師に PT が SIDE を指導して，身体的評価を看護師に認識してもらう試みで，看護師の受け入れもよく，転倒リスク抑制の可能性を感じた。金子氏は，骨粗鬆症治療の導入は，他科患者では，整形外科医の協力が必須である傾向と呼吸器科は転倒発生件数に比べ骨折発症率が高いことが特異的であった。小川氏は，受傷時の入所施設ごとの特異性を報告していた。時間帯的特性を報告されていたフロアからの質問でもあったが，眠剤の状況が知りたくなる発表であった。清川氏は，ロコモの 2 ステップテストは下肢身体機能と関連がある。

☆ポスター 10 「歩行と転倒」

座長：大坂裕（川崎医療福祉大学）

・転倒転落予防におけるウォーキングカンファレンスの効果：八幡領多美衣（千厩病院）

・腰椎・骨盤への徒手療法に伴う転倒回避能力としての健脚度の変化：玉田涼（健康リハビリテーション内田病院）

・大腿骨近位部骨折患者における退院時歩行能力の傾向：津村諒（新潟リハビリテーション病院）

・地域在住高齢者における歩行時足関節角速度は転倒と関連する：大坂裕（川崎医療福祉大学）

・2 ステップテストを用いた，視覚の変化が歩行に与える影響について：稲村真史（大和大学）

・当院回復期病棟における歩行自立基準と基準設定前後における転倒事象件数の比較：平井稔（AMG 上尾中央総合病院）

・歩行姿勢測定における認識と意識の重要性：山田浩（（株）オフィスウィンズ）

〈大坂氏コメント〉

歩行と転倒について，多種多様な演題が発表されたセッションであった。院内の試みとしてウォーキングカンファレンスや歩行自立基準設定の有用性，腰椎・骨盤への治療効果の検証，骨折・リエゾンサービス対象者の歩行能力などの報告があり，地域在住高齢者における転倒と歩容の関連，視覚の変化による歩行への影響，歩行姿勢測定システムの紹介などが発表され，活発な討議が行われた。

☆ポスター 11 「転倒予防関連機器」

座長：平松知子（金沢医科大学）

・介護ロボット（シルエット見守りセンサ）導入による介護者（看護師）の業務改善効果や負担感の変化：佐藤茂（名

古屋市総合リハビリテーション事業団附属病院）

・離床センサー使用患者における転倒転落の要因分析～一般科と精神科の入院患者の違い～：清水寛子（大船渡病院）

・脳神経疾患患者の離床センサー解除における看護師の実態調査：中島礼乃（鳥取大学）

・脆弱性骨折後の運動療法にハイブリッドトレーニング機器を使用した試み：高野義隆（新潟リハビリテーション病院／ロコモ予防研究センター）

・転倒や転落における衝撃と組織損傷：松浦弘幸（創星メディカル情報研究）

・当院における転倒予防活動の取り組みについて～離床センサーに着目して～：赤坂真司（りんくう永山病院）

〈平松氏コメント〉

各施設で使用している離床センサーに関する発表が多く，使用患者の転倒の特徴，解除時の観察項目などの実践報告や，導入後の業務改善効果・負担感の変化，電源消し忘れへの取組の効果の報告であった。他に，脆弱性骨折後にハイブリッドトレーニング機器を用いた運動療法により下肢筋肉量を維持した状態で歩行を再獲得した1事例，生体試料を用いた転倒転落における衝撃と組織損傷状態について報告された。各演題に1－2件の質問があり，活発な討論がなされた。

☆ポスター12 「転倒予防関連」

座長：石川知志（豊橋市民病院）

・骨粗鬆症を呈する認知症者の転倒・骨折～公表された既存データを用いた継続研究～：村山明彦（群馬医療福祉大学）

・大腿骨近位部骨折術後高齢者の居宅退院後における転倒不安感の変化：林健司（島根県立大学）

・職員に対する医療安全研修の効果～参加率と研修内容に着目して～：佐野哲也（すずかけヘルスケアホスピタル）

・地域差を有する2施設における大腿骨近位部骨折患者の転倒場所の検討：佐久間昭利（青葉病院）

・体幹2点歩行動揺計 THE WALKING®を用いた小学生を対象とした「歩行ケア®」事業の取り組み：北原綾子（マイクロストーン（株））

・高齢者の二重課題歩行時における眼球の動きに関する一考察：横山真也（山田病院）

・後方転倒時における腰部・股関節部の力学的応答：林卓未（新潟大学大学院）

〈石川氏コメント〉

村山氏は，転倒による外傷の予防を立案した報告は23件中3件と少なかった。この3件においても立案されたものを実際に扱うことはなく，議論されただけで終わっていた。転倒の予防はもちろん重要であるが，転倒により発生する外傷への対策の必要性が示された。林健司氏は，大腿骨近位部骨折への退院後の不安感に対しては，患者に接する機会の最も多い看護師の対応はもちろん重要である。ただし理学療法士，作業療法士の介入も加えてはどうか，と思われた。佐野氏は，医療安全講習会の重要性の報告。特に討論となる点はなかった。佐久間氏は，抄録には認知機能障害の有無による違いについての記載があった。しかし実際は認知機能障害がある場合には，患者からの情報があやふやな場合が多い。転倒場所は発見者に確認することができるものの，転倒の状況についての詳細な内容は得にくいため，論じることが困難である。北原氏は，歩行ケアの効果は，指導の取り組み方に差がある。授業開始前に体操を毎日行っていたクラスと，体操の頻度が少なかったクラスでは，明らかに違いがあった。横山氏は，計算能力が歩行に影響することはほとんどなかったものと思われる。林卓未氏は，転倒における腰部，股関節への負荷への体型の考慮が議論となった。体重の影響はあまりなさそう。身長による差は？　体型の違いの考慮は必要と思われる。

☆優秀ポスター会長賞

新たな試みとして、ポスター発表の中から、「優秀ポスター会長賞」が2題選ばれた。

・風間咲美氏（福島県立医科大学付属病院）

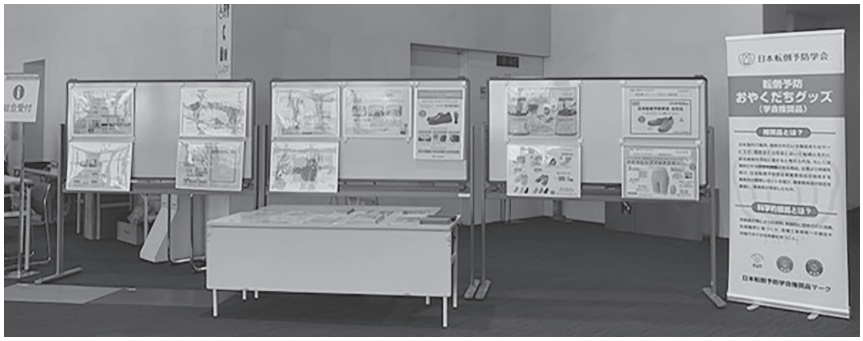
「福島第一原子力発電所事故後に福島県双葉郡に設立された病院における転倒・転落対策」

・牧賢一郎氏（国立長寿医療研究センター）

ポスター会長賞授与

「当センター回復期リハビリテーション病棟における転倒事故の傾向について」
閉会式にて受賞者が発表され、授与式が執り行われた。

■転倒予防推奨品（おやくだちグッズ）コーナー，書籍展示



推奨品コーナー

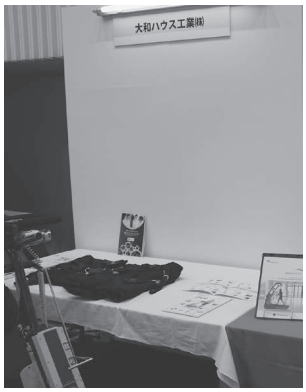
書籍展示

●企業展示

フランスベッド株式会社

雪印メグミルク株式会社

東洋羽毛信越販売株式会社

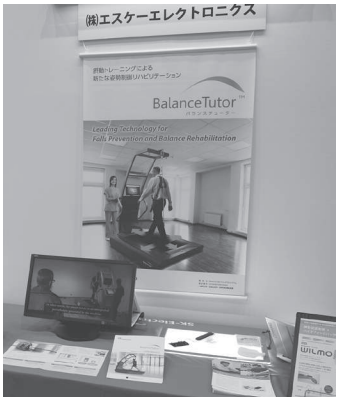


大和ハウス工業株式会社

公益財団法人
運動器の健康・日本協会

有限会社須田義肢製作所

健幸ライフ株式会社



株式会社エスケーエレクトロニクス

パナソニック株式会社

越後工業株式会社

エーザイ株式会社

住友電気工業株式会社

東洋メディック株式会社

報告　日本転倒予防学会第 6 回学術集会　市民公開講座

新潟リハビリテーション病院 院長　山本 智章

『七転び八起き』転倒予防

日時：令和元年 10 月 5 日（土）　10：00 ～ 12：00（開場 9：30）

会場：朱鷺メッセ　新潟コンベンションセンター　2F スノーホール

共催：日本転倒予防学会

後援：新潟県，新潟市，公益社団法人日本整形外科学会，一般社団法人新潟県医師会，新潟県臨床整形外科医会，一般社団法人新潟県医師会，公益社団法人新潟県看護協会，公益社団法人新潟県薬剤師会，公益社団法人新潟県栄養士会，公益社団法人新潟県理学療法士会，公益社団法人新潟県作業療法士会，一般社団法人新潟県言語聴覚士会，公益社団法人新潟県介福祉士会，新潟日報社，朝日新聞新潟総局，毎日新聞新潟支局，読売新聞新潟支局，日本経済新聞社新潟支局，産経新聞新潟支局，NHK 新潟放送局，BSN 新潟放送，NST，TeNY テレビ新潟，UX 新潟テレビ 21，エフエムラジオ新潟，FM PORT 79.0，新潟県介護老人保健施設協会，新潟県老人福祉施設協議会，新潟県小規模多機能型居宅介護事業者協議会，新潟県認知症高齢者グループホーム協議会（順不同）

◆総合司会：橋口知理事（鹿児島大学教育学部健康教育講座 教授）

◆開会挨拶座長：山本智章理事（第 6 回学術集会会長／新潟リハビリテーション病院 院長）

◆基調講演 10：05 ～ 10：35

講師：武藤芳照（日本転倒予防学会 理事長，東京大学名誉教授）

『歴史と川柳から学ぶ転倒予防のコツ～転倒・骨折・寝たきりを防ぐために～』

◆特別講演 10：40 ～ 11：55

講師：大越健介（NHK 報道局 キャスター）

『毎日小さく挫折してます』

◆閉会挨拶：立川厚太郎理事（社会福祉法人新潟県身体障害者団体連合会 理事長）

司会：橋口知氏

座長：山本智章氏

1 年前の学会準備委員会で，毎年の学術集会で行われる特別講演の講師を相談していた時に，武藤理事長から新潟にゆかりのある NHK の大越健介さんにお願いしてはという提案があり，理事長の人脈を通じてとんとん拍子に話が進み，日程の都合上，10 月 5 日（土）の午前中の市民公開講座にてご講演していただくことになった。

大越氏は新潟高校出身で東京大学野球部では投手として活躍し通算 8 勝している経歴を持ち，NHK では以前夜のニュース 9 のメインキャスターとして登場し全国的にも知名度のある方で，新潟では絶大の人気を持っている。今回も準備の段階で 60 社を超える企業から協賛をいただき，新潟日報への折り込みチラシ，NHK 新潟放送局からニュース内での案内などを通じて多くの市民の皆さんに周知することができた。

当日は朝早くから会場の朱鷺メッセに，老若男女，大勢の聴衆が来場し，予定していた 500 席の会場はすぐに満員になり，念のために準備していた隣のサテライト会場を追加して対応した。

橋口知理事から開会の挨拶をいただき，会長の山本智章が司会進行を務めた。基調講演では武藤理事長から「歴史と川柳から学ぶ転倒予防のコツ」とのテーマで，会場を沸かせる楽しく深いお話が繰り広げられ，会場が一気に盛り上がった。転倒を切り口にして体のことや歴史的な人物のエピソードが語られ，時間はあっという間に過ぎた。

講師：武藤芳照氏

続いての特別講演では NHK 報道局キャスターの大越健介氏が「毎日小さく挫折しています」のテーマだったが，いきなり「自分は挫折したことがありません」という言葉で聴衆を驚かせた。その意味するところは，試練と思える体験もそこから何かを学ぶことや何か新しいものを得ることができるということであり，結果的に小さな挫折または挫折ととらえない前向きな考え方が重要であることを自らの体験で語られていた。まさに転倒は挫折であるが，

挫折（転倒）からまた立ち上がること，挫折（転倒）から何かを学び成長することが重要であることを伝えていただいたように思う。講演の中で大越氏はキーワードとして「一点突破・全面展開」という言葉を紹介し，新潟県高野連の球数制限の提言が高校野球を変え，日本の野球界全体に大きな波及効果をもたらす可能性を示唆してくれた。

講師：大越健介氏

大越氏は日本各地，世界各国で直接見たこと，感じたことを人間味あふれる感性と的確な言葉で語っておられ，私がお願いして書いていただいた色紙には「現場主義」という言葉が力強く書かれていた。まさに目に見える真実を伝えること，さらに見えないけれどそこにある思いや心の動きを探る大越氏のスタンスを感じた。講演後の会場からの質問ではキャスター交代の理由は？という答えに窮する質問にも笑顔で答えられ，また新潟県人の良さも語られ，謙虚で温かく，郷土愛にもあふれた人柄に触れることができた。これからもメディアの王道を歩み，活躍されることを期待している。

お二人の講演はあっという間に過ぎ，本学術集会最大の市民公開講座になった。転倒予防の理念を市民に知っていただく良い企画になったと自画自賛している。

最後に前夜の懇親会での靴の履き間違え事件のエピソードも歴史に残る珍事件としてここに記載しておきたい。

報告　転倒予防実践セミナー

新潟リハビリテーション病院　立石 学

転倒予防実践セミナーは，2019 年 10 月 5 日（土）14 時 30 分～ 16 時，朱鷺メッセ 2F スノーホールにて，転倒予防学会第 6 回学術集会のプレ講座として行われた。

定員 100 名の事前申し込みによる公募だったが，事前で 140 名の申し込みを受けた。また，当日参加の希望が多く，講師・スタッフで検討し「当日参加 OK ！」にしたところ，当日受付は長蛇の列になり，大変なご迷惑をおかけしてしまった。参加者は，合計で 279 名（うち転倒予防指導士 127 名）となり大盛況であった。司会は，佐藤成登志氏（新潟医療福祉大学リハビリテーション学部 教授）にご担当いただいた。

【Keynote Lecture】

新潟大学特任教授の今井教雄氏から「1985 年から 2015 年の新潟県における大腿骨近位部骨折発生状況の推移～ 2015 年新潟県高齢者骨折調査より～」と題して，新潟大学整形外科が行った，全県調査について講演していただいた。「大腿骨近位部骨折の 80％が転倒を機に生じており，転倒予防は骨折を減少させる主要因のひとつである。また，健康寿命延伸という観点からも筋力を維持し，転倒しない体を作ることは大変重要である」と転倒予防の重要性を提言していただいた。

今井教雄氏

佐藤成登志氏

【実践セミナー】

司会の佐藤氏より，「転倒予防の知識とスキルを学ぼう～転倒予防に活かす運動の指導ポイント～」と題し，運動指導をより効果的に伝えるために，“運動内容の正しい理解”“運動の習慣化”“運動効果の実感”が大切であることが説明された。さらに，転倒予防に関連する柔軟性・筋力・バランスエクササイズが紹介され，各運動の指導ポイントを学んだ。また，高齢者特有の姿勢である脊柱後湾がなぜ起こるのか，動作にどういう弊害があるのかも知ることができた。

それぞれのエクササイズは，参加者を交え実践的に行われた。新潟医療福祉大学ロコモ予防研究センター所属の佐野佐枝子氏（柔軟性：メディカルフィットネスロコパーク），北村拓也氏（筋力：新潟リハビリテーション大学），神田賢氏（バランス：新潟医療福祉大学）が担当した。

佐野佐枝子氏

左：北村拓也氏

バランス評価の様子

神田賢氏

＜指導ポイント＞

・柔軟性：「ここが伸びている～と，感じてもらう」
・筋力：「いま！　ここの筋肉に力が入っているという実感」
・バランス：「どこの部位のバランスなのか，狙いを定めて！」

500 人収容可能な広い会場であったが，279 名の参加者のため，両手を左右に広げるなどの制限される運動もあったが，参加者全員が上着を脱いで，積極的に運動に取り組んでいた。